

# ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

教授 山本 泰宏

## 1. 教育の責任

私は、大学および学部の各種委員として、図書館長、自己点検・自己評価委員、コンプライアンス委員を務め、学生および教職員に対し、高等教育機関として健全な教育環境を提供する業務を行っている。

また、1年前期に担当する「人間学」と「現代医療史」は総合基礎科目、いわゆる教養科目に分類される。これらの科目では、まず中等教育と高等教育の違いを理解・体験させることを主眼とし、「勉強とは暗記することではない」ということ、多様なものの見方や考え方が存在することを学生に伝えている。

専門基礎科目である「整形外科学」や「リハビリテーション医学」、そして専門科目である「スポーツ医学」では、臨床医学と基礎医学の関連性、リハビリテーションの思想を教授し、学生が将来、実務家として活躍するための基礎的知識と能力の修得を目指している。

### 2021 年度

科目名	時期		受講者
人間学	1年前期	選択	82名
現代医療史	1年前期	選択	44名
整形外科学	2年前期	必修	150名
リハビリテーション医学	2年後期	必修	135名
スポーツ医科学	3年後期	選択	1名
疾病治療論Ⅱ	2年前期	必修	69名

### 2022 年度

科目名	時期		受講者
人間学	1年前期	選択	67名
現代医療史	1年前期	選択	14名
整形外科学	2年前期	必修	99名
リハビリテーション医学	2年後期	必修	90名
スポーツ医学	3年後期	選択	4名
疾病治療論Ⅱ	2年前期	必修	49名
精神医学Ⅱ	2年前期	必修	1名

#### ・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 健康科学大学図書館長

- 2) 健康科学大学健自己点検・自己評価委員
- 3) 健康科学大学コンプライアンス委員
- 4) 健康科学大学広報委員
- 5) 日本股関節学会評議員
- 6) 日本スポーツ整形外科学会評議員
- 7) 日本膝関節学会評議員
- 8) 日本スポーツリハビリテーション学会評議員
- 9) 日本股関節鏡研究会幹事
- 10) Wリーグ 山梨クィーンビーズ チームドクター

1) から 4) は学内活動である。特に 1) の図書館長としては、知の拠点としての大学における知の源泉として図書館が、学生および教職員の知的情報収集機関として最大限の機能を発揮できるよう努めている。

2)、3) については、学生が健全な人間関係のもと、質の高い高等教育を受けられるよう、教育環境の改善や教員－学生間、学生同士の人間関係における諸問題の予防に取り組んでいる。

5) から 9) は学外活動であり、大学教員の社会的責務として、専門分野における日本の学術レベルの発展に寄与している。これらの活動を通じて得た最新の知見は、「整形外科学」「リハビリテーション医学」「スポーツ医学」「疾病治療論Ⅱ」の授業へと還元している。

10) の活動は社会貢献であると同時に、トップアスリートの障害や外傷の予防・治療を行うことで、その成果を講義に活かしている。また、スポーツ分野での活動を志す学生に対して、現場の実際を伝える機会ともなっている。

## 2. 教育の理念・目的

大学は 12 世紀に誕生して以来、「いかによりよく生きるか」を探究する場であり、この思想は現代においても継承されるべきである。しかし、それは現代社会に即した内容でなければならないと考える。

古典的大学の教育の思想として、人間の行動は理論的思考と感情のバランスによって決まり、そのバランスを導くのは理性と倫理観であることを学生は学ぶべきであると考えている。加えて、現代社会は情報にあふれており、我々は玉石混交の情報に囲まれている。このような環境において、情報を取得するスキルや、その真偽を判断する能力は不可欠である。そのため、古典的教育に加え、数理・データサイエンス・人工知能 (AI) に関するリテラシーも必要であると考えている。

このような考えのもとに育成する人材は、社会を的確に理解し、その変化を予測し、自ら考え行動できる自立した社会人である。これは、本学の建学の精神である「豊かな人間力」「専門的な知識・技術力」「開かれた共創力」のうち、「豊かな人間力」と「開かれた共創力」を備えた人材である。

一方、現代において大学で高度な専門知識を学ぶことは困難であり、それは大学院の使命となっている。学部教育では「高度な専門的知識の基礎」を確実に修得することが重要であり、専門科目については教科書レベルの知識の修得を標準の目標としている。さらに、学生が社会の中で生き抜く力を身につけるためには、「人間とは何か」「社会はどのような仕組みなのか」「人間が生活する自然とは何か」という知識や、問題に直面した際に自ら解決する課題解決能力が必須であると考えている。

私が担当する科目は、これらの知識およびスキルを学生が身につける一助となることを、私の教育理念・目的としている。

### 3. 教育の方法

#### ・問題解決型授業

1年前期の「人間学」では、4コマを担当した。特に人類の直立二足歩行の獲得過程については、高校のように既知の知識を伝えるのではなく、化石の発見順に沿って講義を進め、それぞれの化石から何がわかるかを学生と議論した。化石の発見が増えることで、人類の進化過程が徐々に明らかになることを、学生自身に体験させた。

「現代医療史」では、医学的進歩や発見の過程における人間の努力、挫折、葛藤、争いを解説し、最後に「そこから何を学ぶのか」という問いを投げかける授業を行った。

#### ・現場に即した実践的授業

2年前期の「整形外科学」では、疾病の成り立ちを、1年次に学習した解剖学・生理学・病理学と関連づけて講義し、基礎医学の重要性を伝えた。また、講義中には自ら診療現場で撮影した動画や画像を用い、現場の雰囲気や学生に伝えた。

2年後期の「リハビリテーション医学」では、具体的な技術ではなく、リハビリテーションの思想、学問体系、そして現代社会における位置づけを伝えた。

#### ・Teams を活用した授業の工夫

「整形外科学」では、講義前に予習課題や講義スライドを提示し、学生が予習しやすいよう工夫を施した。その他の科目でも、授業中に Poll 機能を用いたアンケートや、ホワイトボード機能を活用した板書により、学生の理解を深める取り組みを行った。授業時間外にはチャット機能を活用し、学生の質問に随時対応した。講義内容を録画しているため、復習後に新たな疑問が生じた学生から、チャットで質問が寄せられることも多かった。

#### 4. 教育の成果・評価

##### ・人間学

オムニバス形式であるため、自分の担当部分の評価は明確ではないが、おおむね目的は達成できていると考えている。

##### ・現代医療史

目標は達成できたと考えている。

##### ・整形外科学

多くの学生に対しては概ね目標を達成できているが、一部の学生から「難しい」「授業の進行が速い」といった声がある。限られた時間内に必要な内容をすべて講義しなければならず、現状では解決が困難である。

##### ・リハビリテーション医学

リハビリテーションの思想や社会との関連を学ぶ授業であり、予想通り「何を覚えればよいのかわからない」という声が多かった。中等教育における「わかっていることを覚える」という学習から、「なぜそうなるのか」「何が問題か」「どうすべきか」と考える高等教育のレベルに、2年後期でも到達していない学生が多い現状を認識する必要がある。

#### 5. 今後の目標

短期目標：大学教育の本質についての教育

2年後期に入っても、中等教育の枠組みから脱却できていない学生が多い現実がある。この問題を解決するためには、1年次に高等教育を徹底的に体験させ、「高校とは違う」と実感させることが重要である。「人間学」と「現代医療史」が選択科目であるため、全学生に高等教育を体験させることは困難であるが、違いを理解する学生を一人でも増やし、高等教育にふさわしい学年の雰囲気を形成したいと考えている。

長期目標：社会の変化に柔軟に対応できる卒業生の輩出

グローバル化が進む現代社会には、さまざまな紛争や分断が存在している。その根底には、自分の価値観に固執し、他者の価値観を受け入れない姿勢があると考えている。また、分断の一因として、金融やITを活用して富を得た人々が、他者への共感を欠くことも挙げられる。

このような状況を解決するために必要なのは、多様な価値観に共感し、理論的思考力と健

全な倫理観を備えた人材である。今後、AI の進化により社会の在り方が変わることが懸念されているが、このような人材は、社会の変化に関わらず常に求められる存在であると考え

る。

本学は医療・福祉の専門職を養成する大学であるが、専門的スキルの修得だけに偏ると、「それしかできない人材」を育成してしまう危険がある。そのような人材は、社会の変化に対応することが困難である。そこで、教養教育を重視し、社会の変化に柔軟に対応できる、多様な価値観に共感し、理論的思考力、さらには健全な倫理観を備えた人材を輩出することこそが、本学の社会的責務であり存在価値であると信じている。したがって、今後は担当するすべての授業の根幹に、多様な価値観への共感、理論的思考力、健全な倫理観の重要性を据え、社会の変化に柔軟に対応できる卒業生の育成を目指す所存である。